# 友情から生まれた本
## ―ガブリエレ・テルギット著『ニューヨークから来た天使』について[1]―

Ein Buch aus Freundschaft. Zu Gabriele Tergits „Der Engel aus New York“.

田丸　理砂
Risa TAMARU

『ニューヨークから来た天使（Der Engel aus New York）』はガブリエレ・テルギットGabriele Tergit（1894-1982）による未刊行の散文作品である。1966年６月、テルギットは、国際ペンクラブの大会参加のため訪れていたニューヨークで、1940年独仏休戦協定直後のフランスでナチ政権下のドイツを逃れてきた亡命者たちの救出にアメリカの人びとが尽力したことを聞く。なかでもニューヨークの仕立屋がこの活動に大いに貢献したことにテルギットは感銘を受けた。社会のいわば下層にいる人たちが、ヨーロッパの大物政治家や著名な芸術家を救うのに一役買ったのである。そしてこのことが本作品執筆の契機となっている。

以下本論では、まず『ニューヨークから来た天使』の概要を述べ、そのうえでテルギットと執筆協力者（当初、彼女は共著者と考えていた）、ニューヨーク在住のジャーナリスト、ヴィル・シャーバーWill Schaber（1905-1996）との往復書簡をおもな手がかり

1　本論はドイツ語で執筆した拙論 Kampf einer Literatin für den „anonyme[n] Heroismus“. Zu Gabriele Tergits „Der Engel aus New York“ In: TEXT +KRITIK Gabriele Tergit. München: text+kritik（刊行時期未定）をもとに大幅に加筆したものである。

として、本作の執筆過程を明らかにしたい。また作品の出版可能性を模索するなかでテルギットが見舞われた、雑誌『シュピーゲル（Der Spiegel)』編集部とのトラブルにも触れ、最後に、本作で取り上げた題材を取り巻くその後の状況の変化を概観したい。なお当作品には英語版『紅はこべ 1940（Scarlet Pimpernell 1940)』とドイツ語版『ニューヨークから来た天使』が存在する。英語版の後に書かれたドイツ語版には、著者による加筆個所も多い。それゆえ本論ではドイツ語版を本作品の最終稿とみなし、以下の論考はドイツ語版に基づく。

## 1．『ニューヨークから来た天使』

タイプ原稿で90枚ほどの『ニューヨークから来た天使』は、それぞれタイトルのついた12の部分から成り、内容的には次の三つのテーマ、①後述される1940/41年の救出活動の歴史的社会的背景、②国際婦人服労働組合（International Ladies' Garment Workers' Union）委員長デイヴィッド・ドゥビンスキーの積極的な呼びかけで実現した、アメリカの縫製職人たちの救出活動への参加、③緊急救済委員会（Emergency Rescue Committee）のヴァリアン・フライたちによるマルセイユでの活動、に分類できる。

①の1940/41年の救出活動の歴史的社会的背景を扱っているのが、冒頭の二つの章「1940年夏のフランス降伏以前」「フランスにおける難民の状況」である。

「1940年夏のフランス降伏以前」では、20世紀初頭から1940年までのヨーロッパから合衆国への移住の状況が記されている。アメリカは元来移民に対して寛容だったが、第一次世界大戦中に移民の数に制限を設け[2]、1924年にはさらにその条件を厳格化する[3]。

2　各国民1910年のセンサスの数の３％、移民の総数は年に357,000人を超えてはならなかった。Vgl. Tergit (o. D.), S. 3.

もっともナチが政権を掌握した後しばらくの間は、ドイツからの亡命先としてはアメリカよりも近隣のヨーロッパ諸国が好まれ、移住者の数はアメリカによるドイツ国民への割り当てを超えることはなかった。またユダヤ系の人びとの中には、パレスチナに移住するものも多かった。なお、本稿では「移民（EmigrantInnen）」「亡命者（ExilantInnen）」「難民（Flüchtlinge）」および「移住（Emigration）」「亡命（Exil）」という語を、『ドイツ語圏亡命ハンドブック1933-1945』に従い、それぞれほぼ同様の意味で使用する[4]。

ドイツと他のヨーロッパ諸国が戦争状態に入ると、ヨーロッパの難民の状況は一変する。とりわけ多くのドイツ人が亡命していたフランスでは、1940年6月独仏休戦協定締結後、事態はいっそう切迫した。つづく「フランスにおける難民の状況」でテルギットは、開戦後間もなく敵国外国人として収容所に収容された、ドイツからの亡命作家リオン・フォイヒトヴァンガーやヴァルター・ハーゼンクレーヴァーなど、当時のフランスにおける難民の状況に言及するとともに、当時のヴィシー政権およびアメリカ政府の彼ら／彼女らへの対応にも触れている。ヴィシー政権は、アメリカに難民の受け入れを要請しながら、みずからは彼ら／彼女らに出国ヴィザの発行を渋るという矛盾した態度をとっていた。一方、

3　各国民1890年のセンサスの数の2％、移民の総数は年に154,000人を超えてはならなかった。Vgl. ebd., S. 3.

4　同ハンドブックに拠れば、「移民」「亡命者」「難民」は状態を指す言葉であり、三者の状態は流動的で、亡命者や難民が結果として移民となることもあれば、また移民として他国に渡った人がまた元の国に戻ることもあり得るという。Vgl. Vorwort, in: Handbuch der deutschsprachigen Emigration 1933-1945. S. XI-XIII. なお国連難民高等弁務官事務所のHPでは、「移民」は定住国を変更した人びと、「難民」は「迫害のおそれ、紛争、暴力の蔓延など、公共の秩序を著しく混乱させることによって、国際的な保護の必要性を生じさせる状況を理由に、出身国を逃れた人々」と説明されている。UNHCR日本：https://www.unhcr.org/jp/what_is_refugee（2019/11/17最終閲覧）

フランクリン・ルーズベルト政権下の合衆国国務次官サムナー・ウェルズはルーズベルト大統領宛ての書簡の中で、フランス側からの難民受け入れ要請[5]には背後にドイツからの強要が疑われるから、断固として拒否すべきと主張している。ウェルズはこうしたドイツの手法について次のように記している。

> 我々が考えるべきは、まずドイツのとった方策による悲惨な犠牲者たちであるという意見に、大統領にもかならずやご同意いただけることと存じます。我々の情報によればこうです。もしも我々および他のアメリカ諸国がこうした全体主義的な恐喝戦術にしたがうことになれば、ドイツ人たちはユダヤ民族に対し、なにもドイツのユダヤ人だけでなく、ドイツに占領されたあるいはこれからさらに占領される国々のすべてのユダヤ人に対して、恐怖政治を開始し、何十万もの不幸なものたちから住居や財産を奪い、彼らをドイツの作戦の駒として利用し、海の向こう側の国々の世論を混乱させようとしているのです。(23)

ウェルズは、ユダヤ人難民とは、相手国を弱体化させようと、ドイツが戦略的に生み出したものであり、彼ら／彼女らは「海の向こう側の国々」を混乱させるための駒なのだから、こうしたドイツ側の脅迫に怯まないことこそが重要だという。このウェルズの見解に対しテルギットは説得力を欠くと反論し、第二次世界大戦中に難民受け入れを拒否するためにアメリカが用いた、似たような論法を例として挙げる。ドイツ占領地域に親族がいるものは、いわば人質を取られているようなものであり、それゆえドイツのスパイになるおそれがあるという「空虚な言い訳を並べて」、合衆国は彼ら／彼女らに門戸を完全に閉ざしたのだった[6]。

5　Vgl. Tergit (o. D.), S. 20f.

ヨーロッパからの難民受け入れに及び腰の国とは対照的な態度をとったのは、ニューヨークの二つの民間救援活動である。本作品の二つの目のテーマ「国際婦人服労働組合（International Ladies' Garment Workers' Union、以下ILGWUと略す）委員長デイヴィッド・ドゥビンスキーDavid Dubinskyの積極的な呼びかけで実現した、アメリカの縫製職人たちの救出活動への参加」を扱った章「救出の試み（Rettungsversuche）」では、アメリカの仕立て職人たちによる難民支援が語られている。1934年、ニューヨークで、すべての国の社会主義者の救出を目指して、ユダヤ人労働委員会（Jewish Labor Committee）が設立される。1940年夏、その中心的な発起人のひとり、ILGWU委員長ドゥビンスキーは、他の主要メンバー[7]とともに密かにワシントンのルーズベルト大統領を訪ね[8]、緊急ヴィザ発行の約束の取り付けに成功する[9]。当初大統領から確約を得たのは300枚だったが、最終的にその数は1000枚に至った。

当時アメリカに入国するには経済的裏付けのために、アメリカ在住の身元保証人（Affidavit）２名を要したが、緊急ヴィザで渡米する人たちの経済的保証は、個人に代わってアメリカ労働総同盟（American Federation of Labor）が請け負うことになった。そしてその多くを支えたのがドゥビンスキー率いるILGWU（ILGWUはアメリカ労働総同盟の加盟組合）の組合員らによる寄付で

6　Vgl. ebd., S. 23.

7　主要メンバーとは、アメリカ労働総同盟（American Federation of Labor）の委員長ウィリアム・グリーンWilliam Green、日刊紙 „Daily Jewish Forward“ の編集長のアレクサンダー・カーンAlexander Kahnと発行人のアドルフ・ヘルドAdolf（Adolph）Held、ユダヤ人労働委員会の事務局長アイザイア・ミンコフIsaiah Minkoffのこと。Vgl. ebd. S. 28f.

8　ILGWUは1936年および1940年の大統領選挙の際ルーズベルト陣営に大いに貢献した。

9　ドゥビンスキーは1962年に初めて緊急ヴィザ発行の顛末を明らかにした。Vgl. ebd., S. 29.

ある。ドゥビンスキーは組合員たちに、ヨーロッパの労働運動指導者やその他の人びとを救うために金銭的協力を積極的に呼びかけたのだった。以下はテルギットが彼ら／彼女らの寄付について言及した個所である。

> ……コートのミシン職人、仕立屋の貴族階級である彼らは、最高金額、すなわち27,000ドルを集めた。組合員はそれぞれ3ドル、イタリアのコート職人は2.25ドルを拠出した。ボタン付け職人は25セントずつ、スカーフ職人は50セントずつ。そしてこの少ない寄付金で、デザイナーたちが工面したよりも多い、2,000ドルも集めた。もっともデザイナーたちは一人頭6ドルを出し、その総計は1,800ドルに達した。ブラウス職人は2.75ドル、下着職人は1.50、イタリアのドレス職人は一人あたり50セントで15,000ドルを集めた。こうして募った300,000ドルはさまざまなルートへと分配された。政治亡命者および知識人の救出のために、ユダヤ人労働委員会が35,000ドル、HIAS（＊ユダヤ移民共済組合Hebrew Immigrant Aid Society）が20,000ドル受け取った。50,000はイギリスの労働組合に、その戦争犠牲者のために送金された。35,000ドルを受領したのはイタリアからの亡命者で、カトリック教徒とプロテスタント教徒の亡命者は15,000ドル、10,000ドルは医療支援のためにロシアに、15,000ドルはアメリカの赤十字に送られた。この金はまた反ナチの出版物の助成にも使われた。（37）（＊補足引用者）

テルギットはここで、たんに寄付の総額を300,000ドルと記すのではなく、あえて彼ら／彼女らの職種と各々の寄付額、そしてその総計を詳述する。この300,000ドルにはたくさんの多様な人びとが係わっていた。このようにして著者は名もない労働者たちに深い敬意を表している。ドゥビンスキーが寄付を呼びかけたア

メリカで働く縫製職人の多くはまた、ヨーロッパから合衆国に渡ってきたかつての移民であった。ドゥビンスキーらによって調達された1000枚のヴィザで救われた人たちの中には、社会民主主義政党の政治家や労働運動指導者の他、画家のマルク・シャガール、作家のアルフレート・デーブリーン、またエーミール・ユリウス・グンベル[10]のような知識人もいた。

『ニューヨークから来た天使』の中で、もっとも多くのページが割かれているのは、三つ目のテーマ「緊急救済委員会（Emergency Rescue Committee）のヴァリアン・フライVarian Fryたちによるマルセイユでの活動」についてである。本テーマは作品の総ページ数、タイプ原稿計93頁の約半分、45頁を占め、「ニューヨークから来た天使」「救助活動はどのように行われたのか」「アメリカでの救助活動」「事態の悪化」「ブライトシャイトとヒルファーディング」「新たな希望」「南フランスでの最後」「戦後」「ふたたびヴァリアン・フライについて」から構成される。このうちデーブリーンを扱った「アメリカでの救助活動」の章[11]と戦後についての２ページ（「戦後」「ふたたびヴァリアン・フライについて」）を除いた記述の大部分はヴァリアン・フライ著『引き渡し要求（Surrender on Demand）』（1945）に基づく。

1940年６月25日、独仏休戦協定締結から３日後、ナチのブラックリストに載った政治亡命者や知識人をフランスから救出するため、ニューヨークで「緊急救済委員会（Emergency Rescue

10　Emil Julius Gumbel（1891–1966）は数学者、平和主義者。早い時期からナチへの警告を行っていた。1933年にフランスに、1940年にアメリカに亡命。

11　デーブリーンはユダヤ人労働委員会によって救出されている。本作で言及されているデーブリーンの言葉は国際救済委員会（International Rescue Committee、ERCの後続団体）に残された資料に基づくものと推測される。類似した記述はデーブリーンの『運命の旅（Schicksalsreise）』（1949）にも認められる。Vgl. Tergit（o. D.), Bibliographie.

Committee)」(以下ERCと略す)が結成される。設立メンバーにはフランク・キングドンFrank Kingdon(ニューアーク大学学長、ERCの代表)、レイモンド・グラム・スウィングRaimond Gram Swing(アメリカのジャーナリスト、第二次世界大戦中イギリスからラジオで戦況を伝えた)、著名なジャーナリスト、ドロシー・トンプソンDorothy Thompsonらが名を連ねた。

1940年8月、ヴァリアン・フライがERCによってマルセイユに派遣され、現地で亡命者の渡航の手配を取り仕切ることとなった。ジャーナリストだった彼は、当時33歳、ハーヴァード大学の卒業生で、ヨーロッパ文化に造詣が深く、フランス語が堪能で、ドイツ語もある程度できた。1935年ナチ政権下のドイツを旅行した際に、彼はユダヤ人迫害を目の当たりにしており、この難しい任務をみずから買って出たのだった。マルセイユに到着するとフライはすぐに、先の1000枚のヴィザとともにアメリカ労働総同盟によって当地に派遣されていたフランク・ボーンを訪ねる。フライとボーンはそれぞれ担当する亡命者を分け、フライは主として作家、芸術家、若い世代の政治的亡命者を、ボーンは労働運動家と年配の社会主義者を請け負うこととなった。

『ニューヨークから来た天使』では、フライがメアリー・ジェイン・ゴールドMary Jayne Gold[12]、ビーミシュBeamish[13]といった仲間を得て、フランス、スペイン、ポルトガルでの救出活動を

12 メアリー・ジェイン・ゴールド(1909-1997)、アメリカ出身の資産家の女性。ゴールドは当時フランスに住んでいた。Vgl. AKTIVES MUSEUM (2008)

13 フライの著書でビーミシュと通称で呼ばれる人物は第二次世界大戦後コロンビア大学、ハーヴァード大学などで経済学者として教鞭を執ったアルベルト・O・ヒルシュマンAlbert O. Hirschmann(アルバート・O・ハーシュマン)(1915-2012)のこと。ヒルシュマンはドイツ出身で政治的理由からドイツを離れ、スペイン内戦にも義勇兵として参加している。Vgl. Varian Fry (2009), AKTIVES MUSEUM (2008)

繰り広げる様子が描かれている。ハインリヒ・マン、ゴーロ・マンやフランツ・ヴェルフェル、アルマ・マーラー＝ヴェルフェルらのピレネー越えなどの成功譚だけでなく、ブローカーに偽造パスポートを売りつけられた失敗についても語られている。なかでも印象的なのは、ワイマール共和国時代の著名な政治家ルードルフ・ブライトシャイトRudolf Breitscheit[14]とルードルフ・ヒルファーディングRudolf Hilferding[15]の悲劇的な最期が記された「ブライトシャイトとヒルファーディング」の章である。彼らはフライらによる再三再四の説得にもかかわらず、身を隠して亡命することを潔しとせず、最後はヴィシー政権下のフランスで捕らえられ、ゲシュタポの手に渡された。なおこれらの記述はすべてフライの著書に拠る。

ところでテルギットの協力者シャーバーの友人ハンス・ザールHans Sahl（1902-1993）もフライの力添えでアメリカに渡ったひとりだった。1941年にザールはアメリカに亡命するが、彼は自身の渡航関連の書類が整うまでERCの仕事を手伝っていた。マルセイユでのザールとフライの出会いについては彼の自伝的小説『わずかな人たちと多くの人たち（Die Wenigen und die Vielen）』に詳しく書かれている。テルギットは『ニューヨークから来た天使』の中で、タイプ原稿3ページにわたりザールの小説から引用している。以下はその一部である。

---

14　ルードルフ・ブライトシャイト（1874-1944）は社会民主党の政治家。1941年ヒルファーディングとともにヴィシー政権からゲシュタポに引き渡され、1944年8月、ブーヘンヴァルト強制収容所で死亡。ナチの発表によればアメリカ軍の空爆により死亡したということだが、ナチによってそれ以前に殺害されたという指摘もあり、死の真相は不明。

15　ルードルフ・ヒルファーディング（1877-1941）は医師、オーストリア派マルクシズムの理論家、社会民主党の政治家。ワイマール共和国時代に財務大臣を務める。1941年ブライトシャイトとともにヴィシー政権からゲシュタポに引き渡された直後、死亡。殺害か自殺か、死因は不明。

カフェに住み、カフェで眠り、カフェで別れの手紙をしたためたものだった。それで、ある友人、とてもおもしろい奴なんだが、そいつがわたしのテーブルのところにやって来て、小声で言った。ひとりのアメリカ人が、ドル札の山と救済予定者の名簿とともに、ホテル・スプレンディッドに降り立ったと。〈あなたの名前もあります。［~~すぐに電話をお掛けなさい。~~］彼はあなたを待っていますよ〉。冗談につきあう気分じゃない、とわたしは言ったが、それでもホテルに電話をし［~~、例の謎の紳士のことを尋ね~~］た。謎の紳士［彼］はすぐに電話に出た。「［~~お名前は何でしたか。~~］ええ［~~コッペですね~~］、どうぞすぐにこちらにいらしてください。お待ちしています」……(45)[16]（［　］内は引用の際、テルギットが元のテキストから省いた部分／下線引用者）

上記の引用は、ザールの小説の中で、主人公コッペが友人宅に招かれた際に語った話である。テルギットは引用に際し、地の文を省略し、また主人公の名を削除するなどして、ザールみずからの経験として読まれるよう細工を施している。なお引用個所の下線部がフライと思われる人物である（ただし小説ではフライの名は出てこない）。

フライおよびERCを扱った最後の部分（本作品の最後の部分でもある）では、第二次世界大戦後フライの功績は正当な評価を受けることなく、彼は仕事にも恵まれず不遇の人生を歩み、1967年夏、59歳の生涯を閉じたことが記されている。

## 2．友情から生まれた本

『ニューヨークから来た天使』の成立過程からは、ガブリエレ・

16　Hans Sahl (1959/2010), S. 326.

テルギットと協力者ヴィル・シャーバーとのあいだの強い信頼関係が見て取れる。テルギットは長年ドイツ語圏外在住ドイツ語作家ペンクラブの秘書を務めており[17]、おそらく両者はペンクラブの活動を通して知り合ったものと推測されるが[18]、その後ふたりの交流はテルギットの晩年まで続いている。自身もジャーナリストおよび文筆家であったシャーバーにとって、テルギットは11歳年上の実績ある同業者であり、テルギット宛ての彼の手紙からは、ジャーナリスト、作家としても、またペンクラブへの貢献という点でも、彼女に向けられた深い敬意が読み取れる[19]。

### 2.1. 共同プロジェクトのはじまり

ふたりの交友を深めるきっかけとなったのが、本稿冒頭で触れた1966年にニューヨークで開催されたペンクラブの大会である。ロンドンに戻った直後に、テルギットはシャーバーに、次のように書いている。

> さて私たちの共同プロジェクトについて。これについては、私はとても楽観的に考えています。もしもその際、適当なストーリーが見つけられれば、いずれにせよユダヤ系のメディアに持ち込むことができます。我々はすべてふたりの名、つまりテルギット＆シャーバー、なんてすてきなチームだこと、で発表しましょう。…〈略〉…そこで（＊Droemerという出版社のこと）本が出せたらいいのですが、「労働組合」についての。見たと

17 テルギットは1957–1981までPEN-Zetrum Deutschsprachiger Autoren im Auslandで秘書（無報酬）を務めた。

18 Vgl. Brief Will Schabers an Tergit vom 21. Mai 1959 (DNB).

19 Vgl. Brief Schabers an Tergit vom 26. Dezember 1960 (DNB), Brief Schabers vom 12. Dezember 1961 (DNB). なおシャーバー自身も1967から1973年までドイツ語圏外在住ドイツ語作家ペンクラブの会長を務めている。

ころ、これまで一般向けの包括的な内容の（＊労働組合に関する）話は出版されていないように思います[20]。（＊カッコ内の補足および下線、引用者）

ニューヨーク在住のシャーバーはペンクラブの大会運営に係わっていたが、大会の公式プログラム以外でも、テルギット夫妻らを手厚くもてなしたようである。手紙では、下線部にあるように、テルギットとシャーバーによる共同プロジェクトについて言及され、おそらく彼女のニューヨーク滞在中に、その契機となるような出来事があったことが推測される。

これに対してシャーバーは、次のようにこたえている。

「労働組合」とはみごとなアイデアです。実際に私はそのために次のような作戦を提案したいと思います。すなわち私はリサーチャーとしてこのプロジェクトに係わるつもりだと。そしてきっとここでならすばらしい資料を調達することができるでしょう。ユダヤ人労働委員会とは、約束が取れればですが、この後すぐ８月の初めに接触を図ることにしましょう。しかしそれと同時に文体の問題や計画的進行のためにも、この本はあなたのお名前のみで出されるほうが適切だと思います[21]。

彼はアメリカにおけるリサーチャーとしての仕事は喜んで引き受けるが、作品は共著ではなく、あくまでもテルギットの名前で発表すべきだと言う。

つづく1966年７月24日付のシャーバー宛の書簡は、テルギットによる、彼女への宛名から「ドクター」という称号を外すことの

20　Brief an Schaber vom 5. Juli 1966（DNB）.
21　Brief Schabers an Tergit vom 20. Juli 1966（DNB）.

依頼で始まっている。肩書きを重視するドイツでは博士号を有する相手に対しては、名前の前に「Dr.」をつけるのが一般的であるが、テルギットからのこうした提案は、両者の関係の変化を示唆している。彼女はさらに共同プロジェクトについて話を進める。

> 「労働組合」のアイデアはまだ漠然としています。何よりもまず「ユダヤ人の仕立て職人たちがヨーロッパの知識人を救う」あるいは „Garmentsworkers Union saves European intellectuals“についての記事、すなわち1940年もしくは1941年についてのストーリーを一緒に書きましょう。もしもあなたが私に資料を調達してくださるなら、もしも私たちがこの記事を大きな新聞、もしくはドイツのラジオ局に採用してもらえるなら、そのときには、そしてその場合にのみ、「労働組合」に取り掛かることにしましょう。あなたがこうした空想をとても真剣に受け止め、我々ふたりの名で発表することを断られたことには、感動しています。記事に関しては、採用されたら、報酬は折半にしましょう。採用されなくても、もちろんあなたのリサーチに対しては支払われなければいけません[22]。

当初テルギットは本ではなく、新聞やラジオ用の記事として仕立屋の話を執筆しようとしていたようだ。またドイツ語と英語のタイトル案が示されており、使用言語については、この時点ではまだ決断がついていない。同じ手紙の追記のなかで、テルギットはふたりの連名で作品を発表する件にも言及している。テルギット曰く、彼女の考える「労働組合」の本は、何も仕立て職人たちの労働組合に限ったものではなく、彼女はそのうちのひとつの話「ニューヨークのユダヤ人の仕立て職人たちがヨーロッパの知識

22　Brief an Schaber vom 24. Juli 1966 (DNB).

人を救う」を書くつもりだという。おそらくシャーバーを「労働組合」についての本の責任編集者として想定していたのだろう。ただしここでは、「労働組合」の本の構想自体、非常に曖昧である。

作業を進めるうちにプロジェクトの内容も明確になり、「労働組合」の本の話は影を潜め、テルギットからシャーバーへの調査依頼もより具体的なものへと変化していく。

> ご覧の通り、ここでも（＊クラウス・マンの母カーチャ・マン宛の手紙）またILGWUについてはまったく触れられていません。フランク・キングドンにインタヴューしていただけませんか。本当のことを知る必要がありますから。グンベルがもう生きていないなんて[23]。彼なら信用できたのに。でもハンス・ザールもちゃんとした人です。ひょっとしたらゲルハルト・ゼーガー[24]が何か知っているかもしれません。どうやってシャガールは救助されたのか[25]。（下線、テルギット／＊補足、引用者）

テルギットは国際婦人服労働組合（ILGWU）の活動に関心をいだくとともに、シャガールのヨーロッパ脱出の真相を知りたがっている。また引用にはキングドンの名は出ているが、これは引用部分の直前にあるクラウス・マンの手紙のなかでキングドンの名が触れられているからであり、この時点でテルギットは彼とヴァリアン・フライとのつながりを知らない。彼女がフライの名を聞くのはこれよりも後のことである。なおここではグンベル、ザール、ゼーガーといったドイツからアメリカ、特にニューヨークへ渡った亡命者がインフォーマントとなる可能性が示唆されて

23　グンベルはこの手紙の直前の1966年９月10に死去している。
24　Gerhard Seger（1896-1967）ワイマール共和国時代の社会民主党議員、戦後アメリカに移住。
25　Brief an Schaber, vermutlich vor dem 4. Oktober 1966（DNB）.

いる。

シャーバーはテルギットの要望に応えてさまざまな機関、人びととコンタクトを取っている。そのなかにはユダヤ人労働委員会の国際事務局長のサミュエル・エストリン、ILGMUの機関誌『ジャスティス（Justice)』の編集者、国際救援委員会の事務総長カレル・スタンバーグなどもいた。こうした調査の過程で、シャーバーは資料収集が年々難しくなっていく現実に直面し、テルギットの取り組みの重要性を改めて認識することとなる[26]。

## 2.2. 新たな展開

1966年10月27日付けの手紙でシャーバーは、ヴァリアン・フライおよびその著書のタイトル『引き渡し要求』に初めて言及する。フライの本との出会いが、テルギットのプロジェクトに新たな展開をもたらすことになる。

> ここにドレスメーカーのイスラエル・ブレスロー[27]のインタヴューがあります。
>
> これと一緒に印刷物（エアメイル）として、緊急救済委員会の手配によるフランツ・ヴェルフェルとハインリヒ・マンのニューヨーク到着を取りあげた『ニューヨーク・タイムズ』の記事をお送りします。
>
> 近いうちにヴァリアン・フライの英語の本：SURRENDER ON DEMANDの抜粋もお送りできることと思います。それは1945年に出版され、翻訳はなく、そもそも時代の混乱のなかで

26 Brief Schabers an Tergit vom 4. Oktober 1966（DNB）.

27 Israel Breslow（1906–1985）は当時ILGWUの副委員長。https://rmc.library.cornell.edu/EAD/htmldocs/KCL05780-067.html.（2020/01/09最終閲覧）

埋もれてしまったのですが、素材としてはオリジナルの史料にも匹敵するほどです[28]。（下線、引用者）

この文面からだけでは、ブレスローのインタヴュー、ヴェルフェルとハインリヒ・マンについての新聞記事、そしてヴァリアン・フライの本の関連性は判然としない。しかしながらブレスローがインタヴューの際シャーバーに緊急救済委員会（ERC）およびヴァリアン・フライという人物を示唆し、このことがフライの著書へと導いた可能性もあるのではないか。下線部「素材としてはオリジナルの史料にも匹敵するほどです」からは、シャーバーがフライの本によって、ヴェルフェル、ハインリヒ・マン、シャガール、その他の救出劇の詳細を知ったことも考えられうる。

シャーバーからの手紙を受けとるとすぐにテルギットはフライの本を調達し、読み始めるや夢中になる。それとほぼ同時期に彼女はみずから手がけるテキストに『紅はこべ 1940（Scarlet Pimpernell 1940）』というタイトルをつける[29]。このフライの著書との出会いによって、テルギットの当初の構想が大きく変化し、プロジェクトの重点は「労働組合」から1940／1941年のフライらによる救出活動へと移されることになる。

## 2.3. シャーバーによる地道な調査

この作品の意義は当然のことながら印刷物と印刷されていない資料を組み合わせたことにあります。印刷されていない資料はインタヴューや政府文書あるいは団体の内部文書から調達しなければなりません[30]。（＊下線、シャーバー）

28 Brief Schabers an Tergit vom 27. Oktober 1966（DNB）.
29 Brief an Schaber vom 3. November 1966（DNB）.
30 Brief Schabers an Tergit vom 7. November 1966（DNB）.

シャーバーはテルギットを励ましつづけ、プロジェクトの意義を強調する。下線部「印刷されていない資料」のほとんどはシャーバーが準備したものである。彼はプロジェクトのためにさらに、ERCの創立メンバーのフランク・キングドン、ユダヤ人労働委員会の元事務局長アイザイア・ミンコフへのインタヴューを行い、デーブリーン、レオンハルト・フランク、コンラート・ハイデンら、亡命作家たちの資料の工面も手伝っている。シャーバーはまた、キングドンのインタヴューの際に、かつてフライらの救出活動に係わっていたメアリー・ジェイン・ゴールドによる当時を記したタイプ原稿を預かったことも報告している[31]。テルギットはさらにILGWU設立60周年記念号『ジャスティス』の手配を彼に依頼している（そこにはILGWUの歴史がまとめられていた）[32]。そして前章『ニューヨークから来た天使』の第一部の概要で引用した重要な資料は、こうしたシャーバーの地道な調査によってもたらされたのだった。

> 私が外交問題評議会で見つけた資料は、昨日お送りました。そこには何よりも、国務次官サムナー・ウェルズのとてつもなく重要な指示があります。偉大なる自由主義者で人道主義的な人物、エレノア・ルーズベルトやアドルフ・バールJr.とともに難民を救おうと最善を尽くしたまさしくあのウェルズの[33]。（下線、引用者）

下線部の原文 „vor allem“（何よりも）、„die ungeheuer wich-

31 Brief Schabers an Tergit vom 17. November 1966（DNB）.

32 Vgl. DigitalCommons@ILR. Justice（Vol. 42, Iss. 11 & 12）, https://digitalcommons.ilr.cornell.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=2129&context=justice.（2019/10/21最終閲覧）

33 Brief Schabers an Tergit vom 4. März 1967（DNB）. この手紙については本稿92ページを参照のこと。

tige Direktive“（とてつもなく重要な指示）といういささか大仰な言葉遣いは、先述のルーズベルト大統領宛てのウェルズの書簡の内容がシャーバーやテルギットにとって、衝撃的な内容だったことを伝えている。難民救援に尽力していたはずの人による、難民の受け入れ拒否が明らかになったのである。

### 2.4.『紅はこべ1940』から『ニューヨークから来た天使』へ

1967年２月22日付けの手紙でテルギットは作品の執筆開始を報告している。

> ええようやく執筆を開始したところです。逮捕、収容所、フランスからの逃亡に関する資料は、たっぷりすぎるほど揃っています。救出活動のためにはフライ、そしてゴールドでじゅうぶんです。足りないものといえば、Ilgwuの歴史です[34]。

この手紙から約２か月後、テルギットは思案の末、ドイツ語ではなく英語で執筆することを決意する[35]。翌月、ついに原稿は完成する。

> 本（小さな本）が完成しました、今週中にお送りしますね。あなたがどんなことをおっしゃるか、とても楽しみです。一番よく書けている章は仕立屋の組合（ILGWU）についてです。フライや他の人のものに関しては大々的に失敬しました、でも思うに、それ以外どうしようもないのです[36]。（下線、引用者）

ここでテルギットは、『ニューヨークから来た天使』（この時点

34　Brief an Schaber vom 22. Februar 1967（DNB）.
35　Brief an Schaber vom 12. April 1967（DNB）.
36　Brief an Schaber vom 28. Mai 1967（DNB）.

では『紅はこべ 1940』）の第三部にあたるヴァリアン・フライらの救出活動を扱った個所について、下線部に「大々的に失敬しました（原文は „stark bestohlen“）」とあるように、フライやゴールド、あるいはザール、デーブリーンらのテキストから多くを引用していることを認めている。

テルギットは『紅はこべ 1940』の発表のチャンスを得ようと試みるも、なかなかうまくいかない。1967年 6 月21日付けの手紙からは彼女の苛立ちと焦りの様子が見て取れる。

> 私の本について。ああ友よ、私はいたずらに英語で書いたわけではありません。ひょっとすると仕立て職人の周りの人たちが、いわば組合で出版できるかもしれないと思ったのです。とりわけ救出活動に係わった人たちが。この本はアメリカの民間の人びとへの賛歌なのですから、合衆国で需要があってもよさそうなものなのに。私はここで（＊ロンドンで）ユダヤ系の出版社に働きかけてみるつもりです。ドイツは？まずもってわたしはもう一度ドイツ語で書きたくもないし、書くこともできません。ドイツでは誰ひとり亡命者の救出など興味がありません、たとえそれが東プロイセンあるいはシュレージエン出身者だとしても。（＊補足引用者）

そしてこの手紙は以下のように結ばれている。

> 『紅はこべ 1940』のために何ができるか、もう一度考えていただけませんか。少なくとも 6 か月も費やしたのです。そしてあなたにもどれほどご尽力いただいたか！[37]

「アメリカの民間の人びと」による救援活動に感銘を受け本作

37　Brief an Schaber vom 21. Juni 1967（DNB）.

を執筆したテルギットにとって、アメリカ側からの無反応は期待外れだったにちがいない。当時のドイツ（およびドイツ語圏）では亡命者を救出した人たちに対してだけでなく、亡命者にも関心はそれほど高くなかったことがこの文面からは窺える。そして手紙の最後で念押しのように、シャーバーに『紅はこべ 1940』の公表への協力を呼びかけている。

1967年９月13日、ヴァリアン・フライは59歳で逝去。シャーバーはテルギットに、みずからが書いたフライの追悼記事[38]を送り、彼の死を知らせる。この間に、彼女は『紅はこべ 1940』をドイツ語にすることを決意し[39]、タイトルを『ニューヨークから来た天使』とした[40]。こうしてテルギットはドイツ語版と英語版、両方を使って出版の可能性を模索する。

> EVA（＊Europäische Verlagsanstaltのこと、ドイツの出版社）から『ニューヨークから来た天使』について断りの知らせがありました。グロスマンが彼らに亡命の全体像を描いた本を送ってきたのだそうです。これでもって他の本はすべて要するに不要なのだとか。彼のほうが好ましく書けているから、他のものは問題にならないというのです。私はこれから原稿をキントラーに送るつもりです。イギリスの出版社からはまだ何の反応もありません[41]。（＊補足引用者）

38 „Ein unbesungener Held starb. Varian Fry half Tausenden von Flüchtlingen“, in: „Aufbau“ (New York, 1934–2004), Friday, September 22. 1967, http://www.archive.org/stream/aufbau3419671968germ#page/n188/mode/1up.（2019/19/21最終閲覧）„Aufbau“ は1934年から2004年までドイツ系ユダヤ人の亡命者が中心となってニューヨークで発行されいてた新聞

39 Brief an Schaber vom 1. Dezember 1967（DNB）.

40 Brief an Schaber vom 29. Dezember 1967（DNB）.

結局、こうした試みからは何の成果も得られなかったようだ。1968年12月のテルギットの手紙には、知り合いのH・G・アレクサンダー[42]が『ニューヨークから来た天使』の原稿をドイツの週刊雑誌『シュピーゲル（Der Spiegel)』の編集部に持ち込んだと記されている。

> 私たちの本のことですが、アレクサンダーが『シュピーゲル』にもっていきました。けれど、はたしてそれが彼らの雑誌にあうかどうかは、かなり疑わしいと思います[43]。

テルギットの疑念の意味するところは明らかではないが、少なくとも『シュピーゲル』へは彼女みずからがすすんで働きかけたわけではないようだ。『シュピーゲル』の編集部に届いたテルギットの原稿は、その後彼女が予想もしなかったやり方で利用されることになる。これについては次章で扱うこととしたい。

### 3.『シュピーゲル』編集部との軋轢

『シュピーゲル』で『ニューヨークから来た天使』の原稿を担当したのは、当誌の編集者ヨアヒム・ライマンJoachim Reimannである。1969年２月初めにライマンは、ヴァリアン・フライの前職およびフライがERCに係わることになった経緯、彼のかつての右腕「ビーミシュ」とは何者か、どのような事情でいつブライ

---

41 Brief an Schaber vom 11. März 1968 (DNB). なおここで言及されているグロスマンの本とは以下の通りである。Kurt R. Grossmann: Emigration. Geschichte der Hitler-Flüchtlinge 1933-1945. Frankfurt am Main: Europäische Verlagsanstalt, 1969.

42 H・G・アレクサンダー（H.G. Alexander）は当時『シュピーゲル』のロンドン支局の編集者であると同時に、テルギットが秘書を務めるドイツ語圏外在住ドイツ語作家ペンクラブのメンバーでもあった。

43 Brief an Schaber vom 12. Dezember 1968 (DNB).

トシャイトが釈放（アルルで）されたのか、などについてテルギットに手紙で問い合わせている[44]。テルギットはこれらの質問に詳細に回答した後、次のような言葉で手紙を結ぶ。

> それからDr.リヒャルト・フリーデンタール[45]が書かれた私についての記事を送付いたします。その記事から私が何者であるかをご理解いただきたく、匿名でこの素材をお渡しするわけではないことを強調したいと思います。何らかの形で私の名が言及されなければなりません。そのことを確約していただけますと、大変ありがたく存じます[46]。（下線、テルギット）

テルギットはジャーナリストおよび作家としての強いプロ意識をもち、それに見合った正当な評価を求めている。テルギットによる再三再四にわたる問い合わせの末、ライマンはようやく彼女のデータを使用する際には、その名前を挙げる約束をした[47]。しかしながら彼女は、またしてもグロスマンの刊行予定の本に原稿の出版を阻まれる。『シュピーゲル』曰く、テルギットのテキストに新事実が隠されているのかを知るためにもグロスマンの本を待ちたい、というのである。

テルギットとライマンとのやりとりから約一年後、『シュピーゲル』（1970年３月16日号）に「社会民主党員の亡命：奇蹟への期待」[48]が載る。これを読んだテルギットは怒り心頭に発し、す

44 Abschrift der Fragen von Dr. J. Reimann vom 5. 2. 69（DLA）. ちなみにブライトシャイトの釈放に関する問いに対し、アルルは通常の滞在であったとテルギットはライマンの誤解を訂正している。

45 Richard Friedenthal（1896-1979）はドイツからイギリスに亡命したユダヤ系の作家。1957年からドイツ連邦共和国（西ドイツ）ペンクラブ副会長、1968年からは名誉会長。

46 Brief an Joachim Reimann vom 8. März 1969（DLA）.

47 Vgl. Brief an Reimann vom 9. Mai 1969（DLA）.

ぐに『シュピーゲル』編集部のライマンに手紙を書いている。

> 1969年2月、友好的で詳細な手紙のやりとりの後、私の名前を出さずに、お渡しした原稿を使用してはならない旨、確約いただきましたのに、1970年3月16日号の68ページでは四段落分、私の『ニューヨークから来た天使』が利用されているのを確認いたしました。資料提供の報酬として250マルクを振り込んでくださるようお願いいたします[49]。

付言すれば、例のグロスマンの著書[50]は当該記事の脚注で挙げられていた。数か月後、テルギットはこの件について、作家のマネス・シュペルバー宛ての手紙のなかで言及している。

> 『シュピーゲル』が私に対して取った態度はあまりに卑劣です。原稿はここの支局の人が持ち込んでくれました。彼らは多くのことを知りたがり、質問一覧を送付してきたり、私にハンブルク[51]に電話を掛けさせることもありました。もしも二年後、当地の非常にまっとうな『シュピーゲル』の代理人が、彼らが私の原稿を利用したことを電話で伝えてくれなかったら、私はそれを知ることはなかったでしょう。彼らは私の名前を挙げないばかりか、報酬の要求にもいまだ何の返答もありません。私

48 „SPD-EMIGRATION. Warten auf Wunder“, in: „Der Spiegel“ 12(1970), https://magazin.spiegel.de/EpubDelivery/spiegel/pdf/45197573 (2019/10/27最終閲覧)

49 Brief an Reimann vom 30. Mai 1970 (DLA). ここで言っている「四段落」とは、ERCのフライによるマルセイユでの救出活動を取り上げた、S. 68の第二列最後の段落から第三列三段落までを指すものと思われる。

50 グロスマンの本ではヴァリアン・フライの名は出てくるが、ERCおよびその活動についてはほとんど触れられていない。

51 『シュピーゲル』の本社の所在地はハンブルク。

は『シュピーゲル』相手に闘うことなどできません。善良な人ばかり、それもアメリカの善良な人びと、ユダヤ人やユダヤ人ではない人たちを扱った本を大切に思います[52]。

テルギットは『シュピーゲル』編集部の約束の反故に侮辱を覚えるが、しかしそれよりもプロの作家およびジャーナリストとしてのこれまでの実績を無視され、敬意を欠く扱いをうけたことに彼女はより傷ついたのではないか。その後、彼女はさらに長編小説『かくの如し（So war's eben)』の出版のために奮闘するも、断りの返事ばかりを受け取ることとなる。当時のみずからを取り巻く状況はテルギットに深い挫折感をいだかせたにちがいない。

## 4．テルギットとフライの評価をめぐって

ところで死の２か月前、ヴァリアン・フライはリーザ・フィトコLisa Fittkoに手紙を書いている。フライは、亡命者の救出活動について青少年向けの本の作成を企画しており、そのために、かつての協力者、リーザと夫のハンスによる亡命者たちへのピレネー越えの道案内の詳細を知りたがっていた[53]。フィトコはこうしたフライの問いに対し、より具体的な説明を求める。

この７か月のことなら、何時間でもお話しできるでしょう。でもまず何に関心をお持ちなのかを知りたいと思います—私たちの用いた方法、私たちがどのように組織したかについての詳細なのか、それとも数多くの突発的な出来事をお尋ねなので

52　Brief an Manès Sperber vom 11. September 1970 (DLA).

53　Brief Varian Frys an Lisa Fittko vom 3. Juli 1967, in: Varian Fry: „Auslieferung auf Verlangen", herausgegeben und mit einem Anhang versehen von Wolfgang D. Elfe und Jan Hans, Frankfurt a.M. 2009, S. 325-326.

しょうか[54]。

引用からは、この時点でフィトコが当時のことを誰かに語るべく準備していた様子は窺えない。このやりとりから18年後、1985年にカール・ハンザー出版からリーザ・フィトコ著『ピレネー山脈を越える道（Mein Weg über die Pyrenäen）』が出版される。そこではフィトコ夫妻がERCの依頼を受けて、フランツ・ヴェルフェルやハインリヒ・マンなどの亡命者の手助けをし、フランス側からスペイン側へとピレネーを越えて移動するのに力を貸した様子が語られている。それから一年後、フライの『引き渡し要求』の初のドイツ語訳がフィトコの著書と同じ出版社から上梓された。原作の発表からはすでに約40年、テルギットの『ニューヨークから来た天使』執筆からも18年経っていた。1982年、ガブリエレ・テルギットはロンドンで逝去、結局彼女はこれらの出版物を目にすることはなかった。

ドイツ語圏では『引き渡し要求』はフィトコの名と関連付けて読まれてきた。原作ではフィトコの名は「F」と略されているが、ドイツ語訳ではフィトコと名指されている。同様に、長い間謎に包まれていた「F」の正体を明らかにするために、ドイツ語版では先述したフライとフィトコの書簡も収められている。一方、テルギットは『ニューヨークから来た天使』を執筆した際、彼女はそもそも「F」が何者なのかは知らなかった[55]。

『ピレネー山脈を越える道』、『引き渡し要求』の出版に際し、ドイツの週刊新聞『ツァイト（Die Zeit）』の1986年9月19日号で、

54 Brief Lisa Fittkos an Varian Fry vom 28. Juli 1967, in: ebd. S. 328.

55 『シュピーゲル』の編集者ライマンからの「F」は誰なのかという問い合わせに、テルギットは「それはどこでも口外されていない、ほとんど唯一の名前」と応えている。Vgl. Abschrift der Fragen von Dr. J. Reimann vom 5. 2. 69（DLA）.

ロルフ・シュナイダーは次のように述べている。

> 『ピレネー山脈を越える道』『引き渡し要求』のような本がこの時期にようやく刊行されたことを嘆くべきか、それともそもそも刊行されたこと自体を歓迎すべきかは、それぞれに判断を任せることとしたい。戦争のカオス的状況や非人間的な管理がつづいたあの時代に、数多くの匿名のヒロイズム、すなわちたくさんの人間的行為がすすんで実践されたのだ。二つの証言、ふたりの証人がここで認められる。彼ら／彼女たちを記憶にとどめるべきである、集団的感謝の証としても[56]。

ガブリエレ・テルギットは、この記事より18年前に、「匿名のヒロイズム」に注目し、しかるべき評価を求めて尽力していた。しかしながら、テルギットは生前中にこれらの努力の成果を人びとに届ける機会に恵まれることはなかった。

---

**Literatur**

テルギットの作品／書簡*(*テルギット宛ても含む)

Gabriele Tergit: „Der Engel aus New York“, o. D., ca. 90 Bl., Kopie, (DLA). 未刊行 ＊本作品からの引用に際しては（　）にページ数を付す。

Brief an Will Schaber vom 5. Juli 1966/ vom 24. Juli 1966/ vermutlich vor dem 4. Oktober 1966/ vom 3. November 1966/ vom 22. Februar 1967/ vom 12. April 1967/ vom 28. Mai 1967/ vom 21. Juni 1967/ vom 1. Dezember 1967/ vom 29. Dezember 1967/ vom 11. März 1968/ vom 12. Dezember 1968 (DNB)

Brief an Joachim Reimann vom 8. März 1969/ vom 9. Mai 1969/ vom 30. Mai 1970 (DLA).

Abschrift der Fragen von Dr. J. Reimann vom 5. 2. 69 (DLA).

---

56 Rolf Schneider: „Hilfe in den Jahren des Chaos“, in: „Die Zeit“ 39 (1986), https://www.zeit.de/1986/39/hilfe-in-den-jahren-des-chaos/komplettansicht (2019/11/11最終閲覧)

Brief Will Schabers an Tergit vom 21. Mai 1959/ vom 26. Dezember 1960/ vom 12. Dezember 1961/ vom 20. Juli 1966/ vom 4. Oktober 1966/ vom 27. Oktober 1966/ vom 7. November 1966/ vom 17. November 1966/ vom 4. März 1967 (DNB).
Brief an Manès Sperber vom 11. September 1970 (DLA).

なお上記DLA=Deutsches Literaturarchiv Marbach、DNB= Deutsches Exilarchiv 1933-1945 innerhalb der Deutschen Nationalbibliothek in Frankfurt a. M.

テルギットの作品以外

Lisa Fittko (1985/2010): Mein Weg über die Pyrenäen. Erinnerungen 1940/41. München: Deutscher Taschenbuch Verlag. 2010.（日本語訳：リーザ・フィトコ（野村美紀子訳）『ベンヤミンの黒い鞄』晶文社1993年）
Varian Fry (1945/1997): Surrender on demand. Boulder: Johnson Books. 1997.
Varian Fry (1986): Auslieferung auf Verlangen. Die Rettung deutscher Emigranten in Marseille 1940/41. München, Wien: Carl Hanser Verlag. 1986. ＊ „Surrender on demand“ の独語訳
Kurt R. Grossmann: Emigration. Geschichte der Hitler-Flüchtlinge 1933-1945. Frankfurt am Main: Europäische Verlagsanstalt. 1969.
Hans Sahl (1959/2010): Die Wenigen und die Vielen. München: Luchterhand Literaturverlag. 2010.
Hans Wagener (2013): Gabriele Tergit. Gestohlene Jahre. Göttingen: V&R unipress. 2013.
AKTIVES MUSEUM (2008): Ohne zu zögern. Varian Fry: Berlin-Marseille-New York. Ein Projekt des AKTIVEN MUSEUMS Faschismus und Widerstand in Berlin e.v. in Kooperation mit der Akademie der Künste. 2008.

参照Webサイト

America Digital Archive: https://archive.pen.org/advanced-search/?genre_ids=10.（2019/10/07最終閲覧）
DigitalCommons@ILR. Justice (Vol. 42, Iss. 11 & 12), https://digitalcommons.ilr.cornell.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=2129&context=justice（2019/10/21最終閲覧）

„Ein unbesungener Held starb. Varian Fry half Tausenden von Flüchtlingen“, in: „Aufbau“ (New York, 1934-2004), Friday, September 22. 1967, http://www.archive.org/stream/aufbau3419671968germ#page/n188/mode/1u (2019/10/21最終閲覧)

ILGWU Local 22 Israel Breslow Papers: https://rmc.library.cornell.edu/EAD/htmldocs/KCL05780-067.html (2020/01/09最終閲覧)

UNHCR日本：https://www.unhcr.org/jp/what_is_refugee (2019/11/17最終閲覧)

PEN Zetrum deutschsprachiger Autoren im Ausland: https://exilpen.org/praesidenten/ (2020/01/03最終閲覧)

„SPD-EMIGRATION. Warten auf Wunder“, in: „Der Spiegel“ 12 (1970), https://magazin.spiegel.de/EpubDelivery/spiegel/pdf/45197573 (2019/10/27最終閲覧)

Rolf Schneider: „Hilfe in den Jahren des Chaos“, in: „Die Zeit“ 39 (1986), https://www.zeit.de/1986/39/hilfe-in-den-jahren-des-chaos/komplettansicht (2019/11/11最終閲覧)

【付記】本研究には平成31年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）の交付を受けた。